市報 ぎょうだ
No.800
平成25年2月1日発行

行田 歴史系譜 227

忍城物語 11

江戸時代の忍城を歩く3　南から城内へ

江戸時代、江戸（東京）から忍城への道のりは、中仙道を通り、鴻巣から日光館林道に入るルートでした。同街道は、堤根の堀切橋を渡って行田市域に入り、石田堤沿いに北上する幹線道路で、江戸時代には石田堤の上にマツが植えられ、街道沿いに松並木が形成されていました。

残念ながら江戸時代のマツは残っていませんが、補植されたマツが当時の面影を残しており、「石田堤の並木」として市の指定天然記念物になっています。

同街道は、堤根から樋上、下忍を抜けて佐間に通じていて、下忍と佐間の村境には、道の両側に一里塚が築かれていました。一里塚は、塚の上にマツやエノキを植えて距離を示す「里程標」の役割がありますが、夏は木陰で休息を取り、冬は寒風を避けることができる、道中の休息所としての役割も果たしていました。現在は、東側の塚だけがTACO株式会社の工場内に保存されており、県の指定史跡「一里塚」として公開されています。

一里塚

同街道はさらに北上し、江戸時代に茶屋があったと伝えられるいげた製菓の前を通り、妙音寺の北東側を回って、佐間の立場に続いていました。いげた製菓の前からは、騎西に至る道が分岐していて、そこに建てられていた道標が、現在、郷土博物館に展示されています。

佐間の立場は、現在のそば処新井屋の前にあり、同街道の休憩所となっていました。参勤交代などで江戸から忍城に帰る城主の行列は、この立場で隊列を整え城下に向かったと伝えられています。また、立場から小道を西に入った所に、市の浮き城のまち景観賞を受賞した「割役庄屋表門」がありますが、この元佐間村の庄屋宅には、忍城主が休憩を取ったと伝えられる「上段之間」が残されています。

同街道は、立場からは現在の県道行田蓮田線と同じルートをたどり、蛇行して佐間天神社の神門前を抜け、天満稲荷神社の所にあった八軒口から城下へと通じていました。城主の行列は、そこから大手門、沼橋門を通って城内に入っていたものと思われます。

（文化財保護課　中島　洋一）

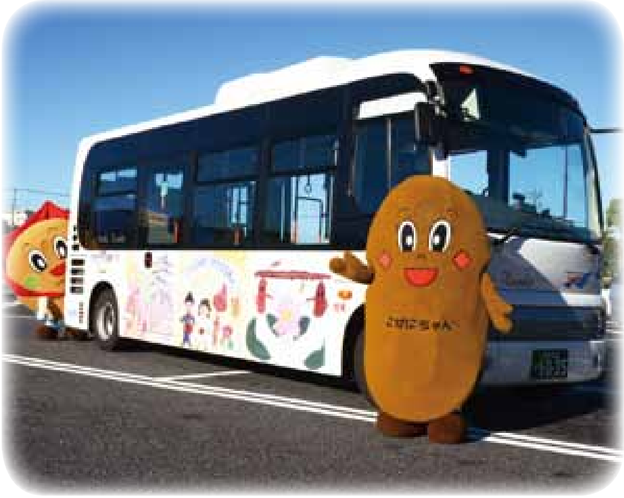
こぜにちゃんが行く！ with フラベぇ

市内循環バス

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。

市内の公共施設や観光スポットを6コースに分け、市内をくまなく運行している市内循環バス。通勤・通学の手段としての利用も増え、平成24年4月から12月まで、延べ14万人を超える人が利用したというから大活躍だね。

映画「のぼうの城」の公開に合わせ、観光客をおもてなしする気持ちを込めて、小・中学生のみんなに「故郷ぎょうだ」をイメージした絵を描いてもらい、観光拠点循環コースのバスにラッピングしたよ。とても愛らしいバスになっているから、ぜひ乗ってみてね。市内循環バスに乗って行田を「ぐるっと」巡れば、新しい行田を発見できるかも。



今月の表紙

1月13日、産業文化会館で「平成25年行田市新成人を祝う会」が行われました。華やかな着物姿やスーツ姿の新成人が参加し、クラスメートとの久しぶりの再会や二十歳の門出を喜んでいました。（関連記事16ページ）

市報変更のお知らせ

より見やすく読みやすい市報を目指し、今月号から文字を大きくするとともに、ユニバーサルデザインを考慮した書体に変更しました。今後とも、市民の皆さんに親しまれる広報紙を作成していきます。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線 318）まで。
■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
■市報をカセットテープに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線 318）までご連絡ください。

VEGETABLE OIL INK 環境にやさしい植物油インキ
市報ぎょうだは再生紙を使用しています

■編集・発行／行田市総合政策部広報広聴課
〒361-8601　行田市本丸2番5号
TEL 556-1111　FAX 550-2116